



木下尚江著作集

第七卷

明治文獻

木下尚江著作集第7卷（第四回配本）

昭和四十四年六月三十日第一刷発行 ©

定価 二二〇〇円

著者 木下尚江  
発行者 藤原正人

発行所 株式会社 明治文獻

東京都豊島区南池袋2丁目8番5号

振替・東京 36290番

電話・東京 (03) 0521

印刷 江明印刷所  
製本 昭栄堂

## 例言

一、本巻には文淵堂発行の『靈か肉か』上篇と、梁江堂発行の『靈か肉か』下篇とを収録した。

一、原本はいずれも四六判、仮綴である。

一、覆刻にあたっては初版本を使用した。三色刷の口絵をモノクロームで印刷した。ことと、巻末の「木下尚江氏著書序文一輯」と広告とをはぶいた点で、原本と異なっている。

一、解説の漢字は、引用文をふくめて、新字体に統一した。

## 序

△神の國は愛に依て融和せられ、人の國は權力に依て羈束せらる、神の國に在りて我等は同胞たり、人の國に在りて我等は治者と被治者とに分かたる、我等の心は彼を望み、我等の肉は此を戀ふ、我等は古來常に此の兩者の間に迷へり。

△何故に我等は基督を十字架に懸けたりしや、我等は神の國よりも人の國を慕ひたれば也、我が權力の情慾の燃ゆる所、我等は不斷に基督を虐殺しつゝあり。

△權力の情慾の凝結したるもの、之を國家となす、如何に進化發展を遂ぐればとて、我等の心に「權力」の一塊碎けざる限り、國家は到底神の子の束縛ならざるべからず、自由を求めて劍を抜くものよ、先

づ汝が胸裡に權力の惡鬼を刺せ。

△「汝等先づ神の國と其義とを求めよ」——是れ始なり、是れ終なり、  
看よ、十字架は常に立てり、願くは我等をして之を背負ふに足るも  
のたらしめよ。

一千九百七年五月

伊香保山陰の茅舎に於て

木下尚江識

## 序

我は權力の野心に鞭たれて喘ぎ／＼走りぬ、一旦其の非を悟りて踵を回らして正道に就かんことを欲するに及び、幾層の痛苦の更に我胸を襲ふを覺わたり、嗚呼地を耕すは即ち天を耕すなり、我之を播き、我之を培かい、日之を温め、雨之を養ふ、露を踏んで野に出で、月を抱いて草廬に眠る、是れ豈に神と共に歩み、神と共に働き、神と共に休むものに非ずして何ぞや。

悲哉、労働を賤みたる武士道の遺傳は我が心の底深く残り、政治法律の空論を弄べる我手は、柔弱殆ど鋤を擔ふの力だに無し、古人曰く詩を作るよりも田を作れと、我熟々此の眞理を思ふて而かも直に之を行ふと能はず、慚愧を忍んで拙詩を綴り、弘く之を同憂の諸君

に類つ

一千九百七年九月

伊香保湯元の茅舎に於て

木下尙江識



# 靈か肉か

## 第一章

### (一)

木下尚江著

黄きに紅くれなるに秋あきの香か左さ右うの巖いはま間に高たかく、打うち仰おほげば峰みね巖いはかはしく迫せまりて澄すめる朝あしたの空そら狭せまく蒼あをし。湯ゆ氣け濛も々うくと立たち籠こもる冷ひややかなる谿たに底そこの黒くろき巖いはか角かどをば、あけびの蔓つるの洒さらしたるももて白しろく編あみたる重かさね草履ぞうりの、朱しゆ珍ちんの鼻はな緒をたてたるに輕かろく踏ふみて、一ひ個ごの美び人じん今け朝さも亦また吐こ息いき香のみつゝ深ふかき物もの思おもひに耽ふける。

小鳥こどり幽ゆかしく歌うたひ交かはして梢こすえより梢こすえに渡わたる。ハラ〜〜と木この葉は幾いく片ひら、其その羽は風かぜに枝えだを離はなれて散ちり來きたり、眞しん紅くに匂におふ楓かへての一はと葉は、垂うな首だれたる彼かの女じよのふくやかなる前まへ髪がらを

かすめて、脱げも落ちげに見ゆる勝色の羽織の、其のなだらかの肩にフワリと留まつた。

驚いて美人は冥想の眼を開いたが、寶石光る細き指に肩の紅葉を摘みながら、其の長き睫毛の晴れやかなる眸子を、木の間遙かの鳥の聲にバツちりと上げた。月尙ほ鮮かに尾上低く残つて居る。前齒チラと紅葉を嚙へて、何見るとも無く只だ熟と天の彼方に彼女は思ひ入つた。

『あゝ、眞個に然うなのねえ』と前髪幾條ハリリと、彼女はやがて又た俯いた。『今始めて私も心から然う思ふわ』都會と云ふ虚偽の沙漠の片隅に枯木を寄せて組み上げた偶像の教會で、神の生命に觸れたいなぞと思ふのは、懶惰な傲慢な貪慾な悪魔の誘惑である。若し眞に神の呼吸を嗅ぎたいと思ふ人があるならば、霧立ちこむる深山の森の奥へ分け入り給へ——私は變なことを言ふ書生だと思つたけれど、あの眞面目な熱心な御様子に妙に心が引きしめられて、宛然良い小刀でいも刻まれるやうに一語々々

判然と彫り着けられたんだもの、あ、真個に都會は沙漠だわ、人情の泉なんてもの一と掬ひでも湧き出て居る所があるでせうか、然うよ、皆んな傲慢で懶惰で貪慾で、真個に惡魔の巢なのねえ、「真に神の呼吸を嗅ぎたいと思ふ人があるならば、霧立ちこむる深山の森の奥へ分け入り給へ」——」

彼女は其の心の奥深く玲瓏と残る聲の響きに兩眼を塞ぎ、乳の邊兩手に緊とかき抱きて、只管其の貴き懐つかしき記憶を辿つて居たが、真白き兩頬何時しか曙の天と一とつに燃へ出で、呼吸劇しく恍惚と開いたる小さき唇の隙を洩れる。

『奥様』と一と聲突如として脚下の巖陰から湧いた。

思はずよろめく足を美人は辛くも踏み堪えて、眞蒼な面に見下ろした。

『御覽遊ばせ、奥様』と年若き女中が湯花に浸した卵黄色の布を左手に掲げて、満面に笑傾けつゝ巖上の主人を見上げて居るのである『好い色に染まりましたで御坐いますせう』

『まあ、忌な、松』と美人は無理に目の縁に微笑の波を寄せたが、其の尙ほ収まらぬ動悸は聲の調子に震へて居た。

『如何遊ばしたんで御坐います、奥様』と、女中は熱と其顔を見つめた。

『だつて出し抜けに大きな聲をするんだもの、私、吃驚したわ』

『御免遊ばせ』とお松は笑ふ『ですけれど好い色に染まりました御坐いませう、奥様、私嬉しくつて仕様が無いんで御坐いますよ』

『何がそんなに嬉しいの』

『東京へ歸りますまでには、澤山に湯の花染のお土産が出来るんですもの』

『お前、そんなに東京へ歸りたいの』

『あら、奥様、何時私が歸りたいと申しました、ですけれど何れ一度は歸らねばならぬ』

『ねじや御坐んせんか』

美人は無言で他へ向いた。

破られたる美しくしき夢の元の影に立ち返へらばやと、彼女は只だ其の一筋に全心を集めたが、焦慮れば焦慮る程心千岐にかき亂れて、彼の懐つかしき記憶の聲さへ雲烟縹緲たる萬里の濤間に消えて行く、「何卒今ま」と聲ありくと聽かせて下ださいませ」と心の底に叫びながら、兩の手に面を掩ふて、聲の行方を逐ひ行くのだ。

噓々と轟く激浪怒濤の大洋に、彼の戀しき聲は再び玲瓏と響き初めて、聲の主の姿さへ今ま一步にて見られるまでになつた時、際涯なき青海原の真中に忽然として一塊の巨巖の如きものが突つ立つた。見れば我が良人の凄き目をして睨みつめて居るのである。其れが忽ち亡き父の冷やかに打ち笑ふ肥満の身體に變はる。忽ち猛火炎々と燃え上がつて、病み衰へし母の怨みの聲が聞える。其の火焰の上に、黒羅紗の古き外套に烏打帽子被りたる彼の聲の主が、旅鞆提げて雪の中に立つて居る。

袖打ち振つて其の幻を拂ひながら、彼女は面を擡げてホツと太息を吐いた。身は元の静寂なる山懐の秋に立つて居る。音するものとしては、巖を穿つて漲り落つる湯川

の眞白の流ばかり。

お松は又た何處へ行つたか影も見えぬ。美人は胸撫で下ろしながら、我が足元に目を注いだ。接吻の痕濡れて光る眞紅の一と葉、あはれ土に塗れて、我が草履の下に踏み破られて居るのである。思はず彼女は一步飛び退いた。其の美しき木の葉の悲慘に、彼女は我身の運命を觀たのである。

『誰を怨むことも無し、——自分で自分を汚がしたのだから——』

(二)

若い綺麗な聲で謳ふのが、湯川の騒がしき音の間に下の方から聴へる。

「花も紅葉も、私は厭やだ」

其の歌聲に彼女は涙押し拭ふて面を上げた。相對したる大岩の陰を丁度歌の主が踏み出した所であつた。未だ二十歳前なる若者の、綴の當つた色褪せた紺の股引を短く穿き、素足の草鞋、頸に白き手拭を結んで居る。彼も巖陰を出ると共に面を上げたが、行く

手の巖上の美人を見ると、急に歌を止めた。そして稿目も判からぬ筒袖の汚された胸に逞ましき兩手を組んで、彼女の立てる巖の下を俯き氣味にノソリノソリと上つて行く。彼女も唇を緘んだまゝ、若者の頭髮に目を放なさずジリジリと我身を向き變へた。其の櫛の齒一つ入れた痕なき亂髪が如何にも美しく眞黒に、底光りがして居るのである。

若者は呑湯の前に立つた。其處には女中のお松が眞黄に巖垣流れ落る湯花の下に駈んで、手の荒れるも厭はずに白き布を染めて居る。

若者は何も言はずに只だ立つて居る。

お松が不圖振り返つた。直ぐ後ろに人が立つて居るので、吃驚して立ち上つたが、顔だけは見知つて居る例の若者なので『あら、飛んだお邪魔致しました、ちつとも存じませんで』と會釋しながら横へ寄つた。

『じゃ、少こし御免なせへ』と若者は側に備へる柄杓取り上げ、腰を屈めてガブリ

と搦んだ。

お松の吃驚した様子の可笑しかつたので、美人は嫣然笑を含んで熟と眺めて居る。お松も主人と遙に見合つて、思はず顔赤らめて笑つたが、又た目を轉じて直ぐ我が前なる若者の上に注いだ。若者は柄杓から一口呑んでは稍々暫ばし眼を瞑つて何事か深く考へて居る。お松は主人の方をチラと見ては又た若者の顔を不審げに目守るのだ。

最後の一口をば、若者は切りに味つて居たが、やがてゴクリと嚥喉を鳴らして呑み下だした。

『お邪魔でやした』と彼は頸玉の手拭解いて口頭の雫拭ひながら、お松に一禮して向き返へる途端、龍の如く横まに枝這ひ延びたる頭上の葉陰に鶴鷄の囀る美しき聲がしたので、彼は其の濃き眉を動かして、パツと大きく目を見張つた。可愛い鳥二羽チ、と飛んで、美人の頭越しに對ひの崖へ鳴き渡つた。若者の目は小鳥に従いて轉じたが、



其の清しき眸子には爛々と熱情が輝いて居た。終始目を放さずに見て居た美人の面にも、サと淡く紅の潮がさした。

眩しげに若者は又た首を低れて、再び彼女の巖の下路を、來し方へ下りて行く。先きの大岩の裾にて窈と振り向いたが、美人の眼が矢張り己が面を電光の如く射て居るので、彼は宛然拜むがやうに隣きして、ツと巖の陰へ隠れて仕舞つた。

美人は、かの我が足下に敗れたる紅の一と葉を拾つて、側への湯川の急流に投げた。紅一點其の眞白なる水の面に落ちたと見るや、姿も色も直ぐ行末知れずに消えて仕舞つた。

美人も巖を下りて歸る。

『妙な男じやありませんか、奥様』とお松が背後から訝かるのである。

『何が妙なの』

『毎朝お湯を呑みに來るんですもの』